

日本の生活文化・文化遺産を守る

園長 児嶋 草次郎

9月7日朝5時半すぎ、台風10号の過ぎ去った園内を恐る恐る見回りました。この数年、台風も激しくなって来ているし、今回は特に「経験したことのない重大な災害がおきる可能性ある」とマスコミが報じていました。一番恐いのは、国の登録文化財に指定されている老朽化した方舟館が倒壊することです。前日夕方6時頃はかなり風雨も激しくなりましたが、3階建ての方舟館を「頑張れ！」と祈るように見上げながら自宅に帰りました。南側の大銀杏、東側の静養館を被うように立っているクヌギの大木等が狂ったように大枝を揺らしながら暴風に耐えていました。これらの木々が、方舟館や静養館を台風から守ってくれているのだと、最近強く感じています。銀杏、クヌギ以外にもヤマモモ、ツバキ、イヌマキ、クス等が、これら石井十次の遺産をしっかりガードしています。

玄関を出て、まず園舎方向に歩きます。今年の台風に比べると、枝もそんなに庭に落ちてないし、倒れやすい桜の木も、すでに落葉がほぼ終わっていたおかげか元気に立っています。小さなフヨウが2本ほど風にあおられて傾いているくらい。園舎も事務所も異常なし。

それから方舟館の方へ小道を下ります。昨夜、悪い夢を見ているので、覚悟をして見上げると、なんと無事でした。100年風雨に耐えて来た文化財は、何もなかったかのように超然と朝の光に照らされながら建っていました。周辺の大木もゆったりと枝葉を揺らしながら、昨夜の激闘の疲れを癒しているように見えました。手を合わせたいくらい周囲の木々に感謝しました。

さて、今回は、昨年度末で閉園した保育園との複合であったこひつじデイサービスセンターについて書かせていただきます。8月末、空室となったところを保育室に改修するための工事も終り、チェックに行ったのですが、様変わりした部屋を見て、様々な思いがこみ上げました。25年間実践したその試みを、検証する必要性も感じました。

柿原政一郎氏が宮崎市長時代邸宅として使用していた建物と土地を、長女の竹本哲子氏より寄贈していただき、その御好意に最大限に報いるために、保育園と老人デイサービスセンターとの複合施設を作ったのです。スタートしたのは平成6年度からですから、今から26年前です。厚労省が土地の有効活用のため複合施設を認めるようになったのは平成4年からだったと思います。すぐに飛びついて、宮崎市役所と県庁に建設の相談に行ったのですが、当時は、各課とも非常に縄張り意識が強く、児童家庭課、老人福祉課、別々に話をしに行かねばなりませんでした（今だったら、同じテーブルで話を聞いてくださいます）。

石井記念こひつじ保育園の場所は、宮崎駅から歩いて10分ほど、市内の一等地（広島1丁目）と言ってもいいでしょう。単なる保育園単独の施設にするのではなく、石井十次と柿原さんとの友情を象徴するような建物にしたかったのです。お年寄りと子供たちとの共生の場とすること、一般の人たちも出入りできるような小ホール（音楽発表会や個展等に活用）も設置して、家族的な運営をすること。お年寄りは子どもたちの心の成長に寄与することで生きがい・やりがいを見出し、子供たちはお年寄りとの交流を通し、心に優しさという文化を受け継いでいくこと、それがねらいでした。日常的な交流が大事ですので、玄関も一つにしました（当時、行政は玄関を別にするよう厳

しい縦割り指導をしていました)。その頃保育園の敷地内に老人デイを持つ所は県内にもありましたが、同じ建物内で交流し合うというケースは宮崎県内でも初めてでした。おそらく九州内にもあまりなかったと思います。私も理事長として初めての仕事でしたので、恐いもの知らずで突進し、強引に形にしました。

これは後から分かることですが、いわゆる「富山型デイサービス」の模範となった NPO 法人「このゆびと一まれ」の活動より、スタートは1年遅いだけでした。「このゆびと一まれ」は、病院を退職した看護師さんが民家を使って老人デイを始め、そのうち、子供や障がい児も一緒に受け入れるようになります。厚労省も注目し、地域共生型福祉施設として推奨するようになります。この「富山型デイサービス」は全国的にも注目されるようになりその後発展していきます。

石井記念の保育園とデイとの共生施設は、その後どうなったか。宮崎県内でも改築を機に老人デイを併設する保育園は次々にできてきましたが、その多くは、共生施設として発展することはできなかったように感じます。我がこひつじデイも、25年でピリオドを打つことになってしまいました。なぜ発展できなかったのか。考えられることを何点かあげておきます。

①社会福祉法人と NPO との違い、そして行政の無関心

おそらく「このゆびと一まれ」の共生の実践は、最初の頃はゲリラ戦術であり、指導監督する地元行政とは色々とトラブルもあったのだろうと想像できます。しかし、厚労省から御墨付をいただくことになり、「特区」にも指定され、また法的にも整備され、充実発展することになったと思われる。今は富山県も評価し支援しています。一方、社会福祉法人は行政により「法令順守」について日頃から厳しく鍛えられており、冒険はなかなかできない体質となって来ています。職員自身の思考も固定化していったのかもしれませんが。宮崎県も宮崎市も、この幼老共生については、ほとんど関心を持っていません。

②時代の変化

NPO や株式会社が高齢者福祉に進出するようになり、高齢者福祉の構図は随分違ったものになって来ました。特に株式会社が住宅型の高齢者施設を次々に作るようになり、デイサービスの経営は厳しいものになって来ました。施設にデイを併設させ、利用者を囲いこんでしまったのです。こちらが子供との共生を売りにしても、現実的には、高齢者の家族の都合が優先されるのです。住宅のないデイサービスはどうしても選択肢の中では弱い立場となっていきます。

③高齢者の意識の変化

25年前頃は、自分がまさか70歳になっても働くなんてことは思ってもみませんでした。当時は65歳位になったら、デイに通う、そのような時代だったのです。団塊の世代が高齢化して来て意識が全く変わってしまいました。今は、70歳になっても自分を高齢者と自覚してない人がほとんどだと思います。実際、体力的にも元気であり、デイを利用するような生活状態ではないのです。高齢者は確実に増えているのに、デイ利用者は逆に減っていくというような流れとなっていったのです。

7年前頃からは、こひつじデイは経営的に赤字となるようになり、保育園との共生施設ですので、保育園でその赤字を補填するというような流れになってしまいます。株式会社であれば、即撤退ということになるのですが、金もうけ主義ではない社会福祉法人ですので、子供たち・お年寄りのため、保育園が支えられるうちは存続させるという考えで経営して来ました。

しかし、昨年度、宮崎市の指導監査で、保育園の補填が問題として厳しく指摘され、やむなく一旦閉鎖することにしたのです。25年間の「幼老共生」とは一体何だったのか。宮崎市にそのような発想が全くないことをなさげなくと思いますが、ケンカはしたくありませんので、一旦撤退し、次の時代に備えたいと考えました。支援の必要な高齢人口は今後確実に増えていきます。団塊の世代もいつまでも元気ではおれません。おそらくあと5年、10年したら、一挙に高齢者施設を必要とする

時がくるでしょう。

団塊の世代以降は、戦後教育を受けて権利意識も高いですので、今までのような画一的、閉鎖的規制いっぱいのお役所的施設は敬遠されることでしょう。姥捨山には行かないというのが団塊世代の共通した感覚だと思います。滅私奉公の戦前、戦中世代とは価値観が違うのです。色んな選択肢を用意する必要があります。

保育園とデイとの共生施設に関わった職員たちは25年間の実践をどう評価しているのか、これも記録しておく必要がありますので、8月末、園長に頼んで「アンケート」という形で簡潔に書いてもらいました。その中からいくつかをここに書き写しておきます。

「(お年寄りの)戦争のお話は就学前の子どもたちでも真剣に聞いていました。そして、お年寄りが、体が不自由な事も理解し、ずっと手伝ったり『大丈夫?』と声をかけてくれたり、心の優しさを自然に培える日々だったように思います」(辻園長)。

「毎日普通にそこに子どもがいる環境は、お年寄りの心の安定にもつながっていたと思います。

(辻園長)

「利用者さんより『子どもの声を聴くだけでも落ち着くよね』という声が聴かれたり、子ども達も利用者さんもホッとした表情をしていた。特別な交流ではなくても、そういった日常的な雰囲気の流れで流れていてよかったと思う」(河野主任)。

「子どもたちにとって、思いやりの気持ちが育ち、友だちにも、優しい言葉かけができるようになりました。お年寄りにとって、認知予防、脳の刺激につながったように思います。子どもを見る目が輝き、自然と利用者の意欲につながったようです。」(財津)。

「お互いが思いやりの優しい気持ちでかかわってました」(本田)。

「お世話される側という意識が、子ども達と触れ合う時は、子どもを守り育てようとする意識に変わり、生きがいをもたれる利用者さんもいた」(川畑)。

「お年寄りとの交流の経験の少ない子どもが、入所当時、お年寄りを恐がったり泣いていたのに、だんだん自分から歩みよりふれあうようになっていく姿を何度も見て来ました。やさしさ思いやりを育むよい機会だった」(佐藤)。

「朝夕のお見送りの時、子どもたちがあいさつを交わしに側にくると、利用者の方々が『ありがとう』『元気がでるよ』とうれしそうに笑みを浮かべておられた様子が忘れられない」(守部)

「おじいちゃん、おばあちゃん存在を自然と受け入れる優しい心が芽生えたり、『さようならあんころもちまたきなこ』のわらべうたを通して、両手をつないで触れ合う事もよるこんで笑顔で出来る様になり、弱者を思いやる心、大切に思う心も育ったなと思います」(西村)。

色々大変な所もあったけれども、子供たちにとってもお年寄りにとってもよかったというのが職員たちの共通した評価でした。アンケートを読みながら無念さがこみあげて来ますが、この育ち始めていた「共生の文化」を消滅させない(現在まだ高鍋町内にあるにしん保育園ではデイとの共生をやっています)ために、これから何をやらねばならないのかと考え始めています。そういえば、高鍋のにしん保育園とじゅうじの家デイを見学した、イギリス、アメリカの福祉関係者が、自分の国にはこのような共生の施設はないと言って、非常に感動されていたのを思い出します。個人主義の国では、このような幼老共生は、不効率、不合理、労働過重ととられるのかもしれませんが。日本の大家族主義的価値観からくる一つの生活文化と言ってよいでしょう。「富山型デイサービス」はその現代の生活文化に合う形でみごとに蘇らせたわけです。この福祉事業は、補助金事業ですので、行政の理解と支援がない限り根付いてはいきません。核家族化が進む中で、その大家族的支え合いを実践できる場は、福祉の世界にしかあり得ません。硬直化した縦割り行政と崩壊する家庭・家族を再生させる方法として、この共生施設は、もっともっと地域の中に生まれていっても良いのでは

ないかと考えます。

この10年20年、私がいつも頭に描いている、年齢を越え障がいの有無を越えた理想の共生施設をここに書いてみます。最近、私のイメージに近い施設がすでに県外に現れていることも偶然知りました。それは石川県にある「佛子園（ぶっしえん）」という社会福祉法人です。

元々お寺の住職であった方が1960年に知的障がい児施設を作ることからこの福祉事業は始まったようです。現在の理事長雄谷良成氏になってから、行政主導型の福祉から脱皮、飛躍。コンセプトは「“ごちゃまぜ”によるまちづくり」。「障害の有無や年齢に関係なく、多様な人たちがごちゃまぜで交流することで、誰もが役割を持ち、機能し、元気になり、地域が活気づく。人生100年時代に求められるのは、そんな地域共生社会です」と説明されています（リクルートワーク研究所）。「お寺は元来、地域の人々が集まり、諸々の問題を解決する場でした。」とも。金沢市内には障害児入所施設、サービス付き高齢者住宅、学生住宅、高齢者デイサービス等が建ち並ぶ一画があり、そのエリア内に温泉、ソバ屋、カフェバーなどもあり、多くの地域住民が出入りする一つの「街」を形成しているとのこと。そのようなコンセプトの「街」を県内に次々に展開されているようで、注目に値します。「福祉がまちづくりの核」になるという気概を持って経営しておられるようで、一度行って学びたくなります。

さあ、私の「友愛の地域社会づくり」の一つの具現化した姿です。一つの現代における理想郷です。石井十次がこの茶臼原大地に理想郷を追い求めたように、私は、町の中に一つの理想郷を描きます。これからの人生100年を考えると、やはりお年寄り、最終的には町の中に集まってくるでしょう。歩けなくなって車イスになっても、自分で買物に行くにはそこしかありません。

全体としては7階建てくらいのビルです。その核は保育園です。まず1階は、コンビニ、店舗、レストラン（夜は居酒屋）等が入ります。店舗やレストランは、障がい者の働く場となります。居酒屋では地ビールを出します。これも障がい者の作ったものです。1階の一部と2階が保育園です。2階の一部には老人デイサービスもあり、お年寄りと子どものたちとの交流スペースももちろんあります。3階には、小規模児童養護施設や障がい者のグループホームが入ります。職員もできるだけ一緒に住んでもらいます。障がい者の人たちは一階の店で働いたりビルの清掃・メンテナンスを担当したりします。小規模児童養護施設の子供たちにも役割はあります。保育園や高齢者の施設でボランティアをしたりアルバイトをしたりします。4階から5階がサービス付き高齢者住宅です。6階7階は元気なお年寄り（60歳以上）の一般住宅です。コロナ後のことを考えると、都会から田舎に移り住む人たちも出てくると思われ、そういう人たちを受け入れるのです。例えば東京から移り住んで、第2の人生を楽しむのもよし、福祉施設等で働いたりボランティアをして社会貢献するのもよし。

ビル全体が大家族であり、様々な交流を楽しむことができるでしょう。カラオケルームがあつたり、小さな美術館や図書室、あるいは診察室があつたりするのもよいかもしれません。災害時の地域の避難所にすることもできます。これこそが日本型の共生施設です。

イメージするのは自由であり、今のところ、お金のことは全然考えていません。もしかしたら、大都会から逃げたいというお金持ちがポンと大口の寄付をくださるかもしれません。

人間はいつかは死を迎えねばなりません。その時が来たら、この茶臼原の石井十次墓地にある共同墓地ですらやかに眠っていただきます。天国で石井十次とも交流していただきます。今はもう子供に死後のことを頼めない時代になって来ていますので、希望者も多いのではないかと思います。お墓まで準備ができるのは石井記念友愛社だけです。私も、体が動かなくなったら、その理想の館に入りたいと思っています。